

「男は仕事」の発想捨てよ

人間の機能は大きく「生きる」「暮らす」「働く」の三つに分かれます。このバランスが取れているのが理想の社会なんだろうけど、男性は「暮らす」機能については非常に苦手。「働く」機能に偏りすぎているんです。

□ ■ □

朝から晩まで仕事して、帰ってきたらテレビ見ながらビール飲んで寝てしまふ。土日もフラフラで寝てる。当然、地域活動もして

2 辻元 清美さん (衆院議員)

女
おんな



いないし、環境や福祉にかかわる余裕が時間的にも精神的にもない。地域とのつながりがないから、定年退職したら、することもなくブラブラしてなあかん。女性には女性でいいじゃない、おばあちゃん、おばあちゃん、子育てなんかでフラフラ。社会との接点が少ないから、問題になっていくけど、社会とのつながりが持ていない。児童虐待なんか問題になっていくけど、社会とのつながりが持ていない。児童虐待なんか問題になっていくけど、社会とのつながりが持ていない。

「男は働き過ぎやで。女と仕事を分担し合った方がええんちゃうの」。パワフルな辻元清美さん

□ ■ □

この考え方を進めていくためには、パートタイムという概念が必要なんだけども、日本にはこのパートタイムに非常に差別がある。正社員より一生懸命働いていても、社会保障は何か付いてない。オランダは非常に参考になる国ですが、パートタイムと正社員の違いは、働いた時間が長い短いだけじゃなくて、社会保障は同じなんです。男は「男は一賃金」で、女は「女は一賃金」で、男も女も、自分のライフスタイルにあった働き方を選べる。生活にゆとりができたから消費も伸びた

つじもと・きよみ 1960年、奈良県生まれ、大阪育ち。早大在学中に民間国際交流団体「ピースボート」を設立。96年の衆院選で社民党から出馬、初当選。NPO法、児童売春・ポルノ禁止法の成立の推進役となる。

の設計図を変えるんです。男も女も働いたからよ。例えば、夫の月収四十万円、妻は専業主婦という典型的な家庭があります。これを夫の月収二十万円、妻も働いて月収二十万円にしたら、急に楽になるはず。週三日、四日働いて、空いている日は地域活動に参加するとか。

こういう機運を日本でも盛り上げるには社会運動の再編が必要。民間非営利団体(NPO)を活用し、女性や環境に優しい政策を採

っている企業の株を買うなどして応援したり、地域に根ざした事業を起こして雇用の受け皿を作ったり。そういう運動が日本の設計図を変えていく。その中心を担っているのが女性です。

今の日本は女性という資源を生かし切れていない。フラフラになった男に「なんか良いアイデアを出せ」と言っても無理。「男は一賃金」で、女は「女は一賃金」で、男も女も、自分のライフスタイルにあった働き方を選べる。生活にゆとりができたから消費も伸びた